

昔の暮らしが持つ教育力に関する一考察
—プロジェクト共育「山里の寺子屋」体験者の感想から—

山 田 啓 次[†]

A Study on the Educational Power of Old Life
—From the impression of a person experienced the co-project
“Yamazato no Terakoya”—

YAMADA Keiji

Abstract

Over the last half century, the rapid advancement of science and technology has made human life more automated and convenient. On the other hand, traditional life, in which various events are felt by the five senses and judged by logical thinking, has declined. This makes it more difficult to see ordinarily things in everyday life and makes people less connected, and thus techniques of life that have been handed down so far are rapidly being lost. These have reduced human power and become a factor to trigger modern educational problems. In contrast, a report from a college student who participated in a learning program to experience old life showed a certain effect on the educational ability (potential curriculum) of old life that cannot be obtained in modern life.

Keywords: old life, logical thinking, communication ability, potential curriculum

[†] 大阪産業大学 全学教育機構 教職教育センター 准教授

草 稿 提 出 日 3月2日

最 終 原 稿 提 出 日 3月28日

1. 目的

人間の生活が自動化し便利になるなかで、論理的思考力やコミュニケーション能力の低下が社会問題化している。これらは生活の自動化に伴い自然や社会、人と人とのつながり、物事の成り立ちが見えにくくなったことに起因するのではないだろうか。筆者は科学技術の発展に伴う生活の自動化によって失われつつある、いわば生活の教育力に着眼し、それを補うと考えられる、昔の暮らしを経験する体験学習を1年間にわたって実施した。本報告は学習者の感想をもとにその教育効果について確認するものである。

2. 背景

科学技術の急速な発展により人類がかつて経験したことのないスピードで社会の仕組みや生活様式が変化している。文明の起源をシュメールとするならばおよそ5千年も前に人類は文明を得ていたことになるが、その後、何千年もの間、生活様式はそれほど変わらない。しかし、18世紀にヨーロッパで起こった産業革命では、効率化を目指した機械化が始まり、農耕文化で繋がっていた地縁社会はゆっくりと崩壊の道をたどるとともに、人々の生活様式は様変わりした。さらに産業の発展は都市集中を生み職縁社会が形成され、現在に至っては核家族化、単身世帯の増加により人と人とのつながりが希薄化され無縁社会^{注1)}という造語を生み出した。この間、通信技術や物流の方法も飛躍的に発展し自宅にいながら遠く離れた世界の状況を知ることができ、さらに物品まで調達する手段を持つようになった。

文明の発生から現在までというスパンで生活様式の変化をみると、ここ半世紀の人間社会の発展は劇的な変化である。変化が急であるがゆえに集団や個人の社会適応が難しくなり現代的な社会病理を生み出していると考えられる。

3. 昔の暮らしの学習力

薪でご飯を炊くという作業の段取りを考えてみる。薪は里山から採取する。丸太や枝を林地から運び出し、一尺ほどの長さに切りさらに縦に割る。かまどに火をつけるにはいきなり薪を入れても火はつかない。まず、藁や落ち葉をかまど内に敷き、その上に細く割いた薪を並べる。昔ならば火打石、昭和前期でもマッチライターで燃えやすい藁か落ち葉に火をつけようやく薪に火を移す。薪も細いものからだんだんと太いものに変えていく。この一連の作業なしには薪を焚くことはできない。つづいて釜に米と水を入れかまどで炊く。約70℃程度になるまでゆっくり弱火で加熱し米の芯まで含水させる。その後、中火で一気に沸騰させ、水が蒸発したら火を止めて20分程度蒸らす。このとき分厚い釜の蓋が

重要な役割をはたす。水分が蒸発した後、釜の中は圧力が高まり100℃以上になっている。圧力と温度を逃がさないために蓋は厚く重くつくられている。火を止めた後の「蒸らし」という作業は、圧力と温度を保ったまま米の余分な水分を除去しご飯をふっくらと仕上げの大事な工程である。このご飯を炊く一連の作業が炊飯の技術である。この技術を習得しなければご飯は炊けないのである。このように炊飯の工程には様々な作業があり、その作業には知恵と論理がある。まず炊飯の準備として燃料の採取、水の準備、火のつけ方、適切な火加減の調整。これらの技術は親から子へと伝承され特に意識することもなく当たり前のこととして習得するのである。つまり炊飯という作業を通して論理的な工程を五感で体験し身につけるのである。当然ながら火をつける際には煙が生じる。匂いも生じる。火がつくと温もりを感じる。近づき過ぎれば火傷をすることもある。「火のない所に煙は立たぬ」という諺があるが、まさにこの体験が一般化したものであり、論理的思考、推察力の醸造へとつながるものであろう。

この炊飯工程は、現在であれば米と規定量の水とを一緒に炊飯器に入れボタンを押すだけである。そこに必要な技術はない。つまり現代的な炊飯作業から論理的思考や推察、物事の段取り等を学習することはできなくなったといえる。これに対し、昔の暮らしを体験するという体験学習が学校教育をはじめ様々なところで実施されている。岩本ら(2017)は、井戸とかまどでご飯を炊くことの意義を、昔の暮らしを体験して火の原体験、歴史的概念の基礎を身につけることと述べている。それは単にノスタルジックな鑑賞ではなく、人々の生活の移り変わりや日々の暮らしのなかの知恵や工夫、先人の願いについて捉えることでありその必要性として理解されている。

生活の技術自体が学習力を持っている例は炊飯だけでなく、家事全般についても当てはまることである。掃除においては茶殻を撒いて埃が立つのを防ぐことや、板を磨くのに米ぬかを利用することなどは物理や化学の理解において認知の基礎になる体験でもある。小泉(2012)は、手や身体、頭を使って何でもしていた昔のくらしは、観察力、注意力、仕事の段取り、知恵の働き、工夫する力、新しい物事を生み出す力を育てた。掃除一つにしても、はたきをかける、箒で掃く、雑巾がけをするという作業がいかに複雑で学ぶことが多いことかと述べている。さらに昔の暮らしは現在でいうところの環境保護についても意識されていた。それは単に無駄を省くということだけではなく、生活排水までうまく処理するという機能を持っていた。神吉(1999)は、昭和10年以前の暮らしにおいて、水の入手先、洗濯、風呂、台所などでの利用、再利用、捨て方が現代よりも複雑で排水が直接川や水路に流れこまない等、水環境と暮らしの多様な関係がみられると報告している。具体的には台所、風呂からの排水を湯殿と呼ばれる敷地内の小さな池にためて、下肥とともに

田畑の灌漑施肥に使う、米の磨ぎ汁などは役牛の飲み水にもするなど直接川や用水路に排出しない捨て方が、農家では普通だったという。

このような昔ながらの生活様式が始まったのはどの時代を起点とするかは難しいのであるが、少なくとも武家政権が中心であった中世には確立していたと考えても数百年は続いてきたといえよう。その後、戦後の高度経済成長期を迎え所得が急増する中で、全国的に電化率を押し上げた。都市部では都市ガスやプロパンガスが普及し、昭和30年代を境に日本の生活様式は大きく様変わりしたといえる。電化率や生活インフラの向上はやがて生活の自動化をすすめ人間は便利で安定した生活を手に入れた。これにより前述してきた昔ながらの暮らしの学習機会が急速に失われていったと考えられる。

さらに学習についての効果という側面から捉えれば、生活が自動化される前の昔の暮らしでは、学びは大人や上級者の模倣から始まり、知恵や技能を学習することによって日常の暮らしを豊かにすることができた。つまり先人の知恵を学ぶうまく使いこなすことによって恩恵を受けられた。それは漁の方法であったり、作物の育て方や加工の仕方、工作の技術であったりと生活の知恵を問うものでもあった。しかし現在の学習といえば主に学校での知識記憶型のものであり、その効果は定期テストでの評価が中心である。教科書の内容を覚えたからと言って直接生活の中で恩恵を感じられるものではない。これら学校で行われる定期テストは個人の内から出る興味関心というよりは、より高い点数を得るために決められた範囲の内容をどれだけ覚えられたかということの外的評価であり、さらに学習者の個人内評価ではなく相対評価で序列化される。高野(2016)は、学びは日常の暮らしのなかから生まれ、日常の暮らしに寄与していく。ところが今日、暮らしと学びの関係は必ずしも明確とは言えない。学びそのものがその人自身にどのような意味をもたらしたかまでを示してくれるわけではないと述べている。いわずもがな現在の学習に全く意味がないわけではないが、得られた知識が自身の生活の中でどのように活用できるかということとは殆どわからない。それゆえ学習のモチベーションが低くなるのは理解できる。

また、かつて子どもの学習活動はいわゆる家事や家業の手伝いであった。水くみや風呂焚きといった日々の作業、子守りなどは子どもの重要な仕事であると同時に多様な学びの機会でもあった。小泉(2012)は、子どもにとって手伝いをすることは大きな意味を持っていた。親が喜ぶ顔を見る喜び、人の役に立つ誇らしさを知ることほど心豊かにしたことか。また弟妹の子守をすることで自分より弱い者に対する憐憫や愛といった、人間にとってもっとも大切なものを学んだのであると述べている。手伝いは単に技術や知識の習得ということではなく情意における人間の成長を促したものと見える。

4. 昔の暮らし体験学習の実践

4.1. 昔の暮らしの体験学習

前述のように、科学技術の発展が生活の自動化を急速にすすめ、物質的に豊かになった反面、昔ながらの生活に付随した教育力が低下したと考えられる。ここではこの教育力を「昔の暮らし教育力」と呼ぶ。それを補う学習方法として体験学習という学びの形態が盛んに取り入れられるようになって久しい。また日本では机上でより多くの知識を記憶するいわゆる詰め込み教育の批判における対案として捉えられることが多い。筆者は20年余り前から昔の暮らし教育力に着眼し、断続的ではあるが過疎の山村にて昔の暮らし体験学習を実践してきた。人間の生活の基本は「衣・食・住」に分けられるが、特に「食」と「住」での実践を数多くこなした。

「食」に関しては、かまどによる炊飯や煮炊きを行う。薪の作り方、着火の仕方、投入の仕方など火を制御する方法にはそれぞれの段階で知恵と工夫があった。また、昔ながらの炊飯は大変手間と時間のかかることである。ご飯は炊飯器が勝手に炊いてくれるわけではなく、片時も離れずに火の制御をしなければならない。おかずは簡素なものであっても、例えば魚の干物であっても、木炭に火を付けやはり丁寧に制御しなければならない。味噌汁に用いる味噌は自家製である。豆腐や蒟蒻も昔は自家製である。ぬか漬けにおいても、前日に野菜をぬか床に埋め、食べる前にぬか床から掘り出し水洗いするというような手間がかかる。これらを体験すること自体を学習と位置付けている。実際に11月頃に味噌づくりを行う。味噌は麹菌が活性化し熟成されるとカビが生えにくくなる。夏の暑い時期ではカビが生えやすいため、秋に仕込みを行いカビの生えにくい冬季に熟成させるのである。そこから生活の知恵と季節感がみてとれる。さらに味噌は一般的に大豆と塩と麹だけでつくられるが、大豆を潰すという作業は重労働である。蒸した大豆を播鉢と播粉木で潰すのであるが、これが相当な時間と集中力を要し忍耐の必要な作業なのである。大学生に体験させたところ、1kgの大豆を潰すのにも音を上げた。昔はこのようなことも子どもの手伝い仕事であったという。このような作業体験から昔の子どもは物心ついたころから忍耐力を鍛えられたのだと気付くのである。

「住」に関しては、主に家屋の修理である。昔の家は木造家屋に藁ぶき屋根というのが一般的であったが、山深い山村では田んぼが少ないため藁ではなく杉皮等が多用された。屋根材一つにおいても論理的な理由があり、それを自分たちで修理することによってそのことに思考を巡らせることができる。また、長らく人が住んでいなかった家屋は戸が開かなくなっていることが多い。これは柱に荷重が掛かり柱の部分だけ沈下していることによる場合が多い。荷重のかかっていない柱や束は、沈下していないため敷居が湾曲するの

である。これを修理するには敷居の下にある束を柱の地盤沈下の分だけ切り取るのであるが、このようなことも実際に観察し体験することによって理解できるものである。湾曲は一般的な敷居の長さ3.6mで、曲がりかたが3 cm程度であれば敷居を正面から見ていたのではわからない。敷居の長手方向から見ることによって確認できるのである。束を、歪んでいり分だけ切り落とせば戸は一瞬でスムーズに動くようになる。これが技術である。

4.2. 体験学習の実践

大阪産業大学では「OSUプロジェクト共育」という教育プログラムを2007年より導入している。これは学生が自主的に取り組むことにより、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」といった社会人基礎力を実際の経験を通して養える、自主活動によるカリキュラムである。「OSUプロジェクト共育」の新たなコンテンツとして、大学1年生から4年生までを対象とした昔の暮らしの体験学習会を企画し「山里の寺子屋プロジェクト」と命名した。フィールドは奈良県南部の標高700mの山間部にある戸数40戸足らずの集落である。公共交通は村営のバスが1日2便と生活不便地である。四方を山に囲まれ県道を挟んで小さな川が流れている。敷地面積は約300坪で建屋は建坪61坪の2階建てである。農家型民家で築年数はおよそ100年のいわゆる古民家である。造りは屋内に広い土間があり、台所にはかまどがある。およそ40年前に無人となったため、かまど等がそのまま保存されていた。母屋以外に土蔵が一棟と20年前に建築された鉄骨の作業小屋がある。もともと林業農家の所有で、当時地元で盛んであった凍り豆腐の加工場の後、米屋や宿屋として使用された経歴を持つ。

「山里の寺子屋プロジェクト」として希望者を募ったところ、発足当初は7名であったが最終的には19名の構成員が参加する団体となった。実施期間は2019年4月～2020年2

表1 山里の寺子屋 各回テーマ一覧

実施回	実施内容
第1回	古民家の修理・山菜を食す・バイオディーゼルの製造
第2回	工作室の改修①(大工・左官作業等)
第3回	工作室の改修②(大工・左官作業等)
第4回	露天風呂づくり・天体観測
第5回	土間づくり・整地・左官(コンクリート)・流しソーメン
第6回	室内大浴場の製作(冬に向け露天風呂を室内に移動)
第7回	お風呂の改修・廃材の処理(大工作業等)
第8回	大掃除と餅つき(餅をついて近所にお裾分け)
第9回	工作室の改修③(床の撤去)・薪づくり

月である。一年を通して月1回、1泊2日の合宿形式で全9回を実施した。各回に実施した山里の寺子屋プロジェクトのテーマ一覧を表1に示す。

このようないわばD.I.Y (Do it yourself) は昔の暮らしの基本である。かまどによる炊飯は毎回実施した。手作業による大作業も毎回のように用意している。ただし、ひと月に1泊2日が基本であるため、手動工具だけでは目的を達しえないため大作業では電動工具やチェーンソー等の使い方も教えた。

5. 参加者の感想より

参加者には合宿の都度レポートを課した。紙面の都合上、全てを載せられないので代表的な意見を取り上げ列記する。

初回の活動における気づきでは以下のような感想が寄せられた。

学生記：

「プロジェクトに参加してみて、やはり知らないことだらけであった。柱が落ちた家を一部とはいえジャッキで持ち上げられることはもちろん、そこに挟むものがその辺に転がっていきそうな簡単な木材で良い、というのはよくよく考えてみても少し違和感が残る。それ程に木材が丈夫という知識が私の中に無かった」

学生記：

「昔の人は目の前のことを行うのに追われていてゆとりがなかった。現代はすごく便利になっていて、その中で生活をさせていただいている有難さに気が付いた」

初期のテーマは家屋の修理である。柱の沈下によって開かなくなった戸の修理にあたり、束を切断したり、柱の腐敗部分を取り除き、新たな木材を継ぎ足したりした。柱を持ち上げる道具は自動車整備に使うような2トンジャッキである。一部とはいえ2トンジャッキで家が持ち上がることに驚きと発見があった。また、食事はかまどでの炊飯をおこなった。なれないかまどでの炊飯は準備から後片付けまで時間を要した。朝食がおわり釜の煤を落とすなど片付けをしていると、あっという間に時間が経ちすぐに昼食の準備の時間となった。現在はロハス (LOHAS)^{注2)} というライフスタイルが注目を集め、一昔前の手間暇のかかる生活様式は贅沢な時間と称されることも多いが、実は、望んでゆっくり物事を進めているわけではなく、作業自体に時間を要するものであることに気付いたようである。選択してこれを選べる現代人は確かに贅沢といえるが、昔は選択ではなく必要に迫られて毎日このような生活をせざるを得なかったと考えると、確かに有難さを感じるこ

とができたのであろう。

2回、3回と回を重ねていく毎に参加者の意識と技術も高まり、できることも多くなったそのころの感想からはコミュニケーション力の必要性が数多く述べられるようになった。

学生記：

「プロジェクトを通して、コミュニケーションの大切さや協力することの大切さ、謙虚さ、周りへの気配りなど身をもって学ぶことがたくさんありました。普段の生活の中でも意識して生活しようと思います」

学生記：

「物作りの際、ひとつのものを作るのにかかるたくさんの作業を1人ではなく、それぞれで分担をしました。それにより速くかつ完璧なものが出来上がりました。団体行動をしたからこそ出来たものなんだと思いました。さらに団体では自分1人の行動をするより周りにみんなに迷惑がかからない行動を心がけるようになりました。これは社会で生きていく上でとても大切な事だと考えているので、私の中で経験が出来たことは大きな意味を持ちました」

学生記：

「他学科の先輩や後輩など様々な人々と交流でき、これまで経験したことのない作業などにも触れることが出来、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました」

学生記：

「メンバーの皆さんはとても温かく迎えてくださり、とても楽しく過ごせました。一中略一何より、メンバーの皆さんと一緒に一つの目的に向かって作業するのはとても楽しく、屋根が出来上がった時には大きな達成感がありました。一中略一迷惑をかけたことも多かったです、仕事をもっと覚え、皆さんの役に立ちたいです」

また技術面においては各自が個々の課題を明確にとらえ、向上心が高まる様子が見て取れる。

学生記：

「物作りの輪に参加してひとつの物の完成に立ち会えた時、達成感が溢れました。私を取り組んだ事はほんのわずかでしたが、それでも自分の事のような気持ちになりました。今回は叶わなかったですが、次やそのまた次の機会があれば「自分が物作りの輪の中心で作

業してみたい!」と思いました」

学生記：

「今まで大工仕事と聞くと大変そうなイメージしかなかったのですが、いざやってみると、もっと上手になりたい、道具の使い方などももっと覚えたいと強く思いました。このプロジェクトは本当に良い経験になり、テキパキと行動できるような人間になりたいと思えました。「主体的に動くこと」がどれだけ大切かを知った反面、今の自分には出来ていなかったのだと分かりました」

学生記：

「後々の流れを理解していると、より効率的に動けた、と感じる点があった。具体的には薪の作成時、保管場所を決めないままに行うことで、後々別の場所に移動する必要が出てしまった。このような二度手間を極力なくすことで、各々のやる気を損なうこと無くゴールに向けて走っていけると考えた」

学生記：

「釜戸での火をおこす作業では、火種に、外で燃やしていた木材を入れたおかげで、すぐに火をおこせましたが、空気を送り込むこと、薪の置き方を火がここについてるから、こっちに火を移すにはどうすれば良いかを考えました。このように、普段はしないことをすることで、自分で考えて行動しなければいけないという、当たり前だけど、普段は誰かがやってくれていることを誰かがやってくれるからやらなくていいやと思うのではなく、自分がやるんだという積極性、意思が生まれたのではないかと思います」

さらに回を重ねるごとに参加者の興味や関心、意欲の向上が見られた。

学生記：

「なかなか経験のできない左官作業をしたことは自分の中で大きな経験となりました。何回も回数を重ねるごとに、物作りをする楽しさや難しさを感じる事が増えてきました」

学生記：

「突発的に実施した流しそうめんは最もプロジェクト活動の意義に近い一面を持っているとも感じた。それは、竹林問題つまり環境問題を理解し、かつものづくり、食文化の要素が詰まっていたからである。竹林が増えているという環境問題に対し、例え一本であったとしても竹を切りかつ日常生活に活かすという一つの対策方法、実現の為に竹を流しそうめんの台に加工する為のものづくり技術、そして皆でわいわい楽しみながら外で行うよりよい食文化、それらを味わうことの出来る活動であったように思う。これが第一回であっ

たなら竹林問題を言い出す雰囲気にはなっていなかったであろうし、竹を加工する技術も持ち合わせていなかった。これがプロジェクトを進めていくことで各々に身についた技術であり人間関係形成能力であり、人間力の向上なのではないか、と体感することが出来た」

一年間9回の昔の暮らし体験学習を終えて、参加者たちがこの体験から得られたものは何だったのか。視野や価値観が広がったという意見が多く寄せられた。

学生記：

「このプロジェクトでは普段ではできない様々な体験をしました。中でも、軒を建てる事やコンクリートを打つ事は印象深い体験でした。講義で学んだ測量やコンクリートの打設を実際に行う事で、机上の知識だったものから、経験を経てより深い理解に繋がりました。また、人との連携が必要な作業が多く、チームワークやコミュニケーションの大切さを感じました。会話から得られるものは多く、他学科の様々な人の知識や価値観を知る事で自身の視野が広がりました」

学生記：

「メンバーは同じ大学内の人ですが、学部学科が違えば得意分野や持っている知識が違うため新しい刺激になりました。雑談の何気ない会話であっても自分にはない知識や考え方で「そういう考え方もあるのか」と驚くことも多々ありました。「多様な面から物事をみる」というのが私の大学生活で重きを置いていたことでもあったので新しい刺激というのにはありがたいと感じました」

学生記：

「回を重ねるごとに作業が細かく分担されることもあり、自分の今しなければいけない事を見つける事が出来ない状況が増えたように思います。楽しいことや、達成感のあることばかりでなく自分の未熟な所に向き合わなければいけないということに気付かされました」

学生記：

「自らのものづくり技術を含めた生きる力の向上を目指した。この活動では古民家の改修を行いつつ人間力を高めるために様々な経験をすることをおねらいとしている。これはつまり、ものづくり技術、昔ながらの体験活動を通して様々な知識を身につけると同時にそれらを行うための基礎体力を養うことである。また集団行動として他者と協力して行う内容であるため、人間性も向上すると考えられ、これらはまさしく生きる力の向上に繋

がったと感じられる」

学生記：

「普通の講義で行くようなフィールドとは一味違う日常生活とは少し離れたところでの生活を体験して、かまどの火の起こし方や、かまどでのお米の炊きかたなど、電気があればボタンひとつ押してしまえば炊けるものも、火を起こして炊く必要がある。手ノコギリなどは使ったことがあったが電動工具を触ったことがなく、最初とても怖かったが、使って練習していくうちに使えるようになっていて、丁寧に教えてもらってこれからも使えるように練習したいとおもった。ひとつのものを協力して作り終えた時の達成感や本気で取り組むことの面白さも改めて実感できた」

学生記：

「今までに使ったことのない道具を使い小屋の修繕をしたり、引越し業者が使う紐の扱い方を学んだりしました。慣れないことばかりで満足に作業をこなせなかったのですが、それらは私にとって大きな経験値となった事は確かです。また、個人ではなく団体で行動していく上で相手を気遣い行動する意義という事も学ぶことができました。それは休憩の時にお茶を渡すと言った小さな事ばかりでしたが、その小さな事の積み重ねが人と人の信頼関係へと繋がりまた団体行動へと繋がって行くのだという事を学べました。それらは誰に教えられたと言うのではなく参加者たちの言動から分かったものでした。人の言動が相手の心を動かし、体をも動かすと言うことに感動した自分もいました」

6. 考察

体験者の感想からわかるように、若者(大学生)の年代では、わずか数十年前まで当たり前だった自動化されない日々の生活、つまり人間がより積極的に身の周りの事象や物事、ひいては周りの人に関わらなければいけない暮らしを体験する機会が失われていたといえる。このような暮らしは年代でいえば大学生の祖父母辺りが体験してきた生活である。昔の人間は忍耐強いといわれたり、何でも器用にできるといわれたりするの、幼少期からこのような暮らしを体験し必然的に個々の生活技術を高めてきたからだと推察する。何百年も以前から連綿と続く暮らしのなかで、自然の摂理に従いながら先人たちが編み出した生活の知恵そのものが教材であり、生活自体が教場であった。それはこのような目的に沿って構成されたカリキュラムではなく、必然的に生活に組み込まれた潜在的カリキュラムが存在したといえよう。これら日々の暮らしのなかに存在する「昔の暮らし教育力」は知識、行動の様式や性向、意識や精神性が、意図しないままに教育されるものであり、その欠如が現在、必要とされる人間力の低下の一因となっているのであろう。そうで

あるならばこの潜在的カリキュラムを意図的に現代の教育システムに組み込む必要がある。すでに文部科学省では2002年度以降実施の学習指導要領で「生きる力の育成」という教育目標を掲げ、経済産業省では2006年より「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」で構成された「社会人基礎力」をスローガンとして掲げている。これらはまさに昔の暮らし教育力で養われてきた能力であると考ええる。

「山里の寺子屋プロジェクト」の参加者の感想からは「技術の発展による恩恵を感じられたこと」「建屋の構造など想像を超える新たな発見があったこと」「チームワークやコミュニケーションの大切さを知ったこと」「視野や価値観が広がったこと」「意欲や向上心が高まったこと」など、自身の成長を感じられたことが明らかである。これらの事実を踏まえ、昔の暮らし体験学習における意義は現代的教育課題に応えるものであり、今回の実践からもその重要性和教育的効果を確認することができた。

7. 今後の課題

本報告は2019年度に始まったばかりの教育実践をテーマにしたものである。教育効果の評価として体験者の感想から質的検討を行ったが、全体の調査というには継続性、定量性を担保できず、また臨床的研究といえるほど個人に焦点を絞られていない。今後、処遇前後の質的変化を的確にとらえられるような手続きを検討し実践を続けながら結論を出したい。

また、本報告で取り上げた昔の暮らしから得られる教育は、教科として近年の学習指導要領にも反映されている。小学校低学年では「生活科」中高学年以降では「総合的な学習の時間」、中学高等学校でも「総合的な学習の時間」「探求の時間」「課題研究」等、学習者が主体的に問題解決をはかるカリキュラムとして取り上げられている。これらの学習は机上の定型的な知識学習により目的を達せられるものではない。文部科学省を含めインターネット上でも数多くの実践事例が報告されているが、これらの教育の成否は指導者のスキルにかかっているといても過言ではない。なぜなら昔同様、身近な大人こそが手本であり生きた教材となるからである。「昔の暮らし教育」カリキュラムにおいては、さらなる実践を積み重ね効果的な構成、実施形態を確立するとともに、より多くの実践者を育てることが必要であると考ええる。

引用・参考文献

岩本廣美, 二十軒起夫 (2017), 「民間非営利団体の催しにおける子どもの学び - 『奈良町井戸とかまどご飯体験』の実践を中心に -」, 『次世代教員養成センター研究紀要』,

3, pp.185-190. 奈良教育大学

神吉紀世 (1999) 「水と集落生活の多様な関係からみる農村景観 岡山県津山市を事例に」, 水資源・環境研究VOL.12, pp.11-17.

小泉和子 (2012) 「昔の暮らしを考えるーいま, そこから学ぶことー」, 『家とまちなみ』, 66, pp.26-29. 一般財団法人 住宅生産振興財団

須藤功 (2004) 『写真ものがたり 昭和の暮らし 〈1〉 農村』, 農山漁村文化協会

須藤功 (2006) 『写真ものがたり 昭和の暮らし 〈2〉 山村』, 農山漁村文化協会

須藤功 (2006) 『写真ものがたり 昭和の暮らし 〈6〉 子どもたち』, 農山漁村文化協会

高野秀晴 (2016) 「『儉約とは何か』 石田梅岩の思想と行動」, 大阪ガスエネルギー・文化研究所, CEL: Culture, energy and life 112, pp.26-29.

山田啓次 (2015) 『創造性とモノづくり』, ナカニシヤ出版

脚注

注1) 地縁社会血縁社会などに対するNHKによる造語。単身世帯が増加し人と人とのつながりが希薄化している現状を表す言葉。2010年1月にNHKスペシャル「無縁社会」が放送され広まった。

注2) “lifestyles of health and sustainability” (健康で持続可能な生活の実現を目指す生活様式) の頭文字をとった略語。